ーゼミ卒業生有志によるー

樋口陽一先生古稀祝い文集

東京大学樋口陽一教授ゼミ同窓会

1990年度－I

樋口ゼミの思い出

平野　哲郎

樋口先生がお元気に古希をお迎えになられたことを心からお祝い申し上げます。

私は，1988年に東京大学に入学し，1990年に法学部に進学しましたが，専門課程で最初に参加したゼミが樋口ゼミでした。私は，日本をよくするためには憲法の理念をもっと現実の政治や司法に生かさなければならないと考えていましたので，憲法のゼミに参加することは大学入学当初からの希望でした。

私たちの学年は憲法の講義は人権も統治も高橋和之先生でしたので，樋口先生とはゼミで初めてお会いしました。あの芦部信喜先生と小林直樹先生が東北大学から三顧の礼で招かれた大先生であるということで，何となく近寄りがたいイメージを持っていたのですが，実際にお話してみるといつも柔和な感じの先生でほっとしました。ゼミの進行は，各自自由にテーマを決めて発表するというスタイルで，私は二重の基準論の限界というテーマを選び，人権類型ごとに合憲性の判断基準を一覧表にまとめ，その比較などをしましたが，このとき，調べて，考えて，書くという研究の面白さに触れたように思います。ゼミでは２学年上の船木さんや同学年の山宮君などとよく議論したことを覚えています。また，当時助手でおられた中山道子先生もゼミに参加されており，コンパの際などに樋口先生の秘話（？）を聞かせていただきました（教授会で時間つぶしにご自分のネクタイや靴のデザインを丹念に研究されておられるとか・・・）。

ゼミ旅行では，司馬遼太郎の「街道を行く」にも登場したという樋口先生の仙台のお宅にお招きいただきました。そのとき私は「最近，改憲論が声高に主張されていますが，先生は護憲の立場からもっと積極的に発言されるべきではないでしょうか。」という甚だ生意気な質問をしたのですが，それに対して「あまりいつも発言していると，人権のインフレ化と同じで言葉がインフレ化してしまう。いざというときには発言するつもりです。」というお答えをいただきました。その後９４年に「外的環境がなし崩しに『いざ』に近づいているようです」との年賀状をいただき，その後，先生は一般向けの書籍やさまざまなメディアを通じて日本が戦争ができる「普通の国」になってしまうことに対して強く警鐘を鳴らされるようになりました。私も，先生の言葉を若い世代に伝えるべく，「憲法と国家」（岩波新書）や「個人と国家」（集英社新書）などのご著書を

毎年学生に推薦図書として挙げています。

卒業後は，毎年近況をお知らせする年賀状をお送りすると，必ずそのときどきの内容に応じた達筆のお返事をいただきました（達筆すぎて判読に苦労するのもまた楽しみの一つです。）。例えば，私が育児休業取得後，裁判官を退官して大学の世界に入ったときには激励していただき，大変嬉しかったことを覚えておりますし，昨年龍谷大学法科大学院が不認可とされたときには「いささか義憤を感じています」というお言葉に励まされました。

最後に今でも鮮明に覚えている先生のお話を紹介したいと思います。それは，ある学会に参加された先生が「今回の学会で報告者になっていたある『大家』の学者が報告時間の半分以上を準備ができなかったいいわけに使っていた。そんなことなら『学者をやめちまえ』と靴を投げようかと思った。」とおっしゃった言葉でした。普段温厚な先生だけにそのときの厳しい口調と「靴を投げる」という表現が特に印象に残っています。私も，この言葉を忘れずにこつこつと研究と教育の道を進んでいきたいと思います。

最後になりましたが，先生には是非，これからもますますお元気に，社会の木鐸としてご活躍いただきたいと願っております。